

クトゥルフ神話 TRPG用シナリオ アイデア集

ユキ・オトコ

無垢な双子

事件の真相

稀代の資産家の夫婦がおり、長いこと子供を授かることができなかった。その夫婦は子供を授かるためにありとあらゆる幸運の物品を世界中から収集し、神に祈りをささげた。

その中には「星の知恵派から盗み出された盗品である『輝くトラペゾヘドロン』」も存在していた。

その結果、ようやく子供を授かることができた。事前の検査で双子であることが判明し夫婦はとても喜んでいたが、何の因果か、双子の片方はなぜか体が欠損していて生きてゆけない体だった。そのため、残った健康な子供を大事に育て、残ったほうを丁重に葬るよう病院にお願いした。子どもは成長し、自分に双子の姉妹がいたことすら知らなかった。しかし、或る日大事故で輸血が必要なほどの状況になっていた。両親は血液の提供を試みたが、なんと彼女は100万人に1人という非常に希少な血液型の持ち主だった。そんな人間は見つかりっこない。両親があきらめていた時に、病院から驚くべきことを聞かされる。

この病院は資産家の夫婦の残した欠損児を培養液に浸して延命しておいた。それはひとえに血液型の希少性を把握していたことと、いざという時に資産家をゆするネタにできると考えていたからである。

かくして娘は「姉妹」の血液を受けて延命に成功するのであるが、娘はその生と死のさなかに夢の中でその「姉妹」から不思議なお願い事をされる。

資産家が集めた物品の中にある「奇妙な形の箱」を暗い部屋で明けてほしい、というのである。

娘は言われるがまま、その箱を部屋で開いてしまう。その後唐突に少女の意識は途切れるのであるが、その間際に夢の中であった姉妹の声で「ありがとう」という声を聴くのである。

彼女は無垢であったがゆえに正気を失うほどの消耗もなく、「闇をさまようもの」を召喚してしまうのである。

そして彼女は自覚のないままに「ニャルラトホテプの僕」と成り果てた。

KPが探索者の周りに娘キャラを二人、時々ちらつかせるように配置することである。

どちらかが、善人でもう一方が怪しい立ち回りをするため、探索者を混乱させ、一方のみを擁護し始めた際に、ニャルラトホテプとしての本性をあらわにし、探索者に牙をむく。

電腦の申し子

ある時、人間の脳を電腦化（情報化）する実験が行われていた。

その際に利用されたのは齢15程度の若者たちだった。

彼らは脳髄を生きたまま抉り出され、そのすべてを情報へ変換するためにありとあらゆる管をつながれた。

そして、実験を統括するために用意されたスーパーコンピュータに彼らの脳が「印刷」されかかったとき、何の因果か彼らは外なる神の世界にリンクを果たしてしまった。

実験場は混沌と恐怖の苗床と成り果てたが、その中でも機械は動き続けていた。

自身に目的がないままに…

・黒幕

狂気の実験場で唯一「生存」している人間である。それ以外の人間は生きているように見えるが、実際は黒幕の脳髄の中に蠢く電腦化された外なる神との接続を維持するためにだけに生かされている「接続線＝消耗品の器」である。

黒幕の目的は日々不安定になってゆく外なる神との接続を維持するための器である「人間の脳髄」を外から供給し続けることであり、そのために電子掲示板などに様々な「招待状」送りつけていた。

探索者の知り合いがこれに巻き込まれる。もしくは、探索者自身に招待状が届くところから序章は始まる。

正体は「富豪」「研究者」「実験体」のいずれか。

・実験場

スーパーコンピューターによってすべてが管理されていた実験場。ある富豪が自身の不死身を願った結論として「電腦化」を目論見、その第一実験として金で若者たちを集めた。

実験場とはいえ、大規模なものではなく3階建て（地下2階）の建物である。

しかし、外からの攻撃には核シェルターでも耐えられる構造になっており、一階の扉以外の侵入経路は存在しない。

内部ではエレベータと階段で昇降できるようになっているが、コントロール室のある3Fにはエレベータも階段も行かれない（地下B1Fのセキュリティを解除しなければならない）。

電気の自給自足を行っている（地熱発電）ため、電力には事欠かないがいくつかの回線は朽ち果ててしまっているため機能していない区画もある。

この中には、実験の煽りで死亡し、ゾンビとして復活した人間もいる。多くのゾンビは自我を失っており、自身（の脳）の代用品として接続されていない脳を見つけると接続させようと襲ってくる。

・実験場で出会う人間1（実験体）

10代の若い女性。自我があり、過去に「招待状」でこの場所に来てしまったと話す。ちょっと時代がずれているのか、ナウいだのチョベリグだの古い流行語をよく使う。ゾンビに会う、ゾンビを倒す際に時々ショックのせいか口がきけなくなったり、動けなくなったりする。

正体は実験体にされてしまった若者の一人。招待状に誘われた人間を襲ううちに（脳髄が接続に足るほど満たされ）自我が表出するようになり、最後に襲った人間と役割を入れ替え続けることで若者の肉体を維持している。自身の新しい肉体の憑代として探索者たちを狙っている。（精神的生存者）

実験場の構造の多くを把握しており、「当時の」実験場の区画・設備については詳しい。

「黒幕設定時」

自身の中に何かが潜んでいることを自覚しており、それからの自身の解放を望むために肉体を入れ替えている。しかし、肉体をいくら入れ替えても自身の中の存在が消えないため、その権化（と思い込んでいる）ゾンビを攻撃し、まだ汚染されていない探索者になり替わろうとしている。

自身がその主人格であると自覚する（彼女の本来の肉体「異形の門」（B2F）を発見する）と彼女は「精神の落とし児」として発現。

・実験場で出会う人間2（NPC探索者、哀れな犠牲者）

30代の男性。自我があり、この実験場に入り込んでしまった娘を探しに来ている。この世界について「ここが実験場であったこと」「実験の暴走で荒廃したこと」「荒廃後も人を呼び寄せている魔の巣窟であること」を知っている。

彼も同じく脳髄を器として提供されている一人であり、死亡している。肉体そのものは彼であり、若干の腐敗臭はするものの、実験場そのものに腐臭が満ちているので探索者が気付くことは困難である。彼の持つ非常食はすべて賞味期限ぎりぎりなものが多く、いくつかの食品は期限を過ぎてしまっている。

死人であるが、根っからの善人である。

・実験場で出会う人間3（富豪）

50代の車いすの女性。事故で脳を損傷しており、器にも出来ないためゾンビたちにも襲われない。（精神的生存者）盲聾啞の三重苦であり、ボロボロの紙とペンを足元に置いている。

自身の実験のせいでこの惨状を起こしてしまったことから、その贖罪のために活動する。足が不自由のため車いすでの移動しかできない。そのため、回路が生きているB2Fから1Fまでしか移動

できない。ただし、車いすは電動性で至る所に充電設備が生きているため移動は速い。自身の意識下では探索者たちを逃がすため、この実験場の設備を完全に停止させるために行動しているが、コントロール室である3Fにたどり着けない上、自身も非力なため何も対策を取れない。また、自身がゾンビに狙われないため、即物的な危機察知能力がなく、ゾンビがいる部屋に探索者たちを誘導してしまうこともある。

「黒幕設定時」

宇宙的存在に支配された無意識化の部分（例えば足・声など）は完全に狂気そのものである。動かないはずの足がボロボロだったり、時々奇声を挙げる（ゾンビたちを呼び寄せる）のはこのせいである。

彼女を殺すと彼女を生かしていたゾンビたちと融合して「肉体の落とし児」として発現。

彼女を殺さずコントロール室での（情報化された狂気を超えて）メインスイッチを停止させることができれば、ゾンビたちは「頭ぱーん状態」になる。ちなみに彼女は自害する。

・実験場で出会う人間4（研究者）

人間と書いてはいるが、実態はホログラムで映し出されている。本体はスーパーコンピュータ。実験時にその場にいた研究者が電腦化し、スーパーコンピュータに取り込まれた。

人間の電腦化実験における「成功例」である。（機械の生存者）

多くの場合、取り込まれたスーパーコンピュータ内から調査をし、コンピュータに接続している何かが人間を自身のパートとして取り込んでいることを突き止め、それを止めるために探索者たちに警告を発した（探索者への招待、もしくは警告）。彼のホログラムは危険への警鐘・攻略のヒントとなっている。しかし、時にはそれをスーパーコンピュータ側が悪用して罠に嵌めることもある（15%ロール位）。

彼の所在は3Fのコントロール室であり、B1Fのセキュリティを解除しなければ行けない。

「黒幕設定時」

彼の所在を突き止め、彼にパソコンの破壊コードのようなものを入力するように言われる。拒否もできるが、次の瞬間に他の生存者（1.2.3）が体を支配されてコードを入力してしまう。

室内のホログラムが起動し始め、召喚儀式が始まる。ちなみに召喚時にはホログラムの用意した幻覚（生かしてきた生存者の数（1-4）の落としご*0.5スペック）との戦闘に勝利したうえで機械を物理的に破壊しなければならない。

ちなみに破壊に失敗しても召喚は自動的に失敗である。

一部が顕現するものの、機械の潜在能力をオーバーフローしてしまうため（生かしている生存者数*1+3ターン-倒したゾンビ数*0.5（最大3）/6）*1d10/1d100SAN値減少となる。

・室内構造

作ってない

- ・対応人数

2人からが望ましい。一人だとゾンビとの戦闘がきつい。

- ・エンディング

いずれにせよ、実験場は壊滅する。

哀れな共食い

・九頭竜コーポレーション

とある地域への集中的な投機を行っている巨大企業。その急速な成長の陰には、何かしらの後ろ盾がなければ考えられないとまで言われている。

九頭竜は創業者が事業の創始を始めるに至った夢の中の怪物の姿を現しているとされている。ちなみに、創業者は企業が完全に軌道に乗ったころにビルの屋上から投身自殺をしている。今の社長は、創業者の遺書によって指名された人物で、今もその天才的な手腕により順調に業績を伸ばしている。

・社長

周りから天才的手腕とまで言われるほど有能な人物だが、その実創業者の遺書から導かれた真なる遺書を見つけ出し、その「創業者の死後の未来の指示」を忠実に守っているに過ぎない。自身が無能であることを自覚しているが、それを副社長・専務以外の部下に伝えられないでいる。

今回の特定地域への集中投機は彼の指示ではない。

・副社長

今回の地域への投機を実行した人間である。表舞台に出ることを好まず、姿を見たものは誰もいない。

周りを扇動することでこの地位へと上り詰めた経緯から外部からの報復を恐れているからだと噂されている。社長・専務と直属の部下一名のみが彼との連絡手段を持ち、部下のみ彼と面識がある。

社長の弱みを握る数少ない人間の一人である。勿論それを出世の盾にしたことはない。「彼の行動はできる限り放任せよ」という第一級指示が創始者の遺書に含まれているため、社長もあまり彼の行動を把握していない。

投機の目的は「この地域に残っている信仰のパワースポット地域を再興し、新たな観光資源とすること」である。

・専務

彼女は全ての関係者である。ありていに言えば、彼女が本事件における図書館役でもある。彼女は誰の味方でもなく、探索者の味方である。

遺書において「彼女は、この会社の良心である。生かすも殺すも好きにすればよい。」

旧創始者では、社長の弱みとこの会社の成り立ちを知っている数少ない人間である。副社長の顔を知る数少ない一人でもある。

黄色の印では、支部長が教団の幹部であり、ここに派遣されていることを黙認している。彼女は

今回の投機に疑問を抱っており、教団側からの意見を取り入れるためにあえて結託している。イエローヘルメッツは、彼女に教団上層部の動きを報告してもらっている。彼女が彼らと繋がっていることは誰も知らない。彼女は教団の過激派に自分の恋人を殺されており、復讐のために彼らに近づいている。

・支部長（幹部1）

彼は教団の幹部の一人である。会社へ潜り込んでおり、この地域への企業の不当な行動をけん制するために教団から派遣されている。

彼の目的は、この企業の投機が教団にとって（自分たちを潤すための）利益となるか否かを判断することにある。会社の行動と教団の繁栄が同調する様調整している。

しかし、その心の裏には教団全体への危惧感がにじみ出ており、上層部の排斥と過激派の沈静化を常に模索している。過激派との特殊なつながりがある。

・副社長の部下（係長級）

副社長の部下であり、組織での地位は低いがそれは将来の見返りのためである。勿論、教団とのつながりもなく、副社長の指示に素々と従っている。

しかし、その能力は卓越したものがあり、情報収集能力のみならず、戦闘部隊としても一流の腕を持っている。

副社長には社長以上に忠誠心を持ち、現在副社長にのみ従っているが、近年自身の立場が全く進展しないことに対して若干の不信感も抱いている。

・黄色の印教団

この地域に根付いているハスター信奉者の教団。とはいっても、ハスターの威光を持ってこの地域に栄華をもたらさんとしているに過ぎない。

他の邪神についても教義上の理解はしており、その上で「信奉者に対して温情をもたらす」ハスターを優先的に信奉しているに過ぎない。

・教祖

自由に信仰を選ぶことこそが自身の繁栄へとつながると信じている。自分が救われたいがために神を挿げ替える。

そんな教祖であるからこそ、彼と繋がる教団上層部は俗物的な側面が強く、一定の教義以上の信仰は持ち合わせていない。

「自分が潤うのであれば悪魔であろうと信奉する」

・幹部1（支部長）

会社に潜入している幹部。詳しくは支部長参照。

- ・幹部2

教祖に従う俗物。太鼓持ち。幹部1とは対立している。

過激派のことは疎ましく思いつつも、時々自分の意にそぐわない人間を唆して排除して貰つたりする。見返りは教団が所有する魔導書の断片。

- ・イエローヘルメッツ

教団教儀信奉者で過激派。新世界のためにこの地域を黄色の印の支配下に置き、ハスターへの供物として提供することを目的としている。

全員が何らかの魔術の取得をしており、ハスターを召喚するために様々な活動を行つてゐる。

- ・イエローヘルメッツの構成員（副社長）

黒幕。その才能は副社長の地位、神の単独召喚を可能とした技量など全てにおいて優れている。

扇動家としては一流。しかし、その技能が災いして周りに対する不信感が大きい。

しかし、外見は卑屈さを形にしたと言って良いほど暗く醜い。

「周りが俺を化け物と呼ぶから、そうなろうと化け物に成り果てだけだ。」

実は殺されたはずの専務の恋人。記憶が混同しており、襲われた後訳も分からず街中をうろついた末に教団穏健派（幹部1）に救われる。しかし、過激派の力に『敵意』のようなものが芽生え、イエローヘルメッツのメンバーでありながら、内部崩壊を目論んでいる。